

# 東日本大震災

## 古里の記憶伝えたい 石巻・長面地区で 大川伝承の会が語り部活動 輪切り大根 で頬にすす、無病息災も祈る /宮城

毎日新聞 2017年2月6日 地方版



すすのついた輪切りの大根を頬に押しつけ、無病息災を祈る来場者たち＝石巻市長面地区で

東日本大震災の津波で甚大な被害を受け、人が住めない災害危険区域に指定された石巻市長面（ながつら）地区で5日、故郷の再生を願うイベントが二つ開かれた。市立大川小の児童遺族や地元住民らでつくる「大川伝承の会」による初めての地区ガイドがあり、地元出身の語り部が約30人の参加者に震災前の風景や記憶を語り伝えた。地区の神社ではすすをつけた輪切り大根を頬に押し当て、無病息災や大漁を祈る奇祭「アンバサン」もあり、地元出身者らの笑顔が久しぶりに戻ってきた。【百武信幸】

カキが1年で育つ豊かな内湾、長面浦の前で「大川伝承の会」の語り部、三條すみゑさん（58）は静かに参加者に語り出した。「津波は渦巻いて、何度も何度も来たそうです」。長面地区は震災前は約150軒、約500人が暮らし、津波で100人以上が死亡、20人あまりが今も行方不明という。三條さんも自宅にいた三男を津波で亡くした。



長面浦の前で語り部活動をする「大川伝承の会」の三條すみゑさん（左）＝石巻市長面地区で

三條さんは震災前の地区の風景写真や自身のはっぴ姿で踊るお祭りの新聞記事を示し、懐かしむように「長面は祭りがにぎやかでした。震災の年の夏も絶やさず開き、あの時は泣いて太

鼓をたたき、みんなで赤飯を泣きながら食べました」と振り返った。参加者の男性は「もう住めないなんて」と残念がり、周囲を見渡し、思いをはせていた。大勢をガイドしたのは初めてという三條さんは「離れて初めて地元の良さが分かり、住めるなら本当はまた住みたい。長面が忘れられないよう、語り部などを通じ伝えていきたい」と話した。

長面浦を望む高台にある大杉神社では、300年以上の歴史がある伝統行事「アンバサン」が境内であり、氏子や地区出身者ら約40人が、無病息災と五穀豊穰（ほうじょう）、大漁を祈った。同神社は「安波山（あんばさん）」とも呼ばれ、同神社の本社である北野神社の高橋範英宮司によると「アンバサン」は「安らかな波であるように」との意味があるという。

高橋宮司が太鼓を打ち鳴らし「長面地区の一日も早い復旧を成し遂げたまえ」と祝詞を上げた。地元で「ヘソビ」と呼ぶすすを輪切りの大根に付け、参拝者同士ほっぺたに押しつけ合うと、境内は笑顔であふれた。

同地区出身で、大川小6年だった長男堅登さんを亡くし、4年だった長女巴那（はな）さんが行方不明の鈴木義明さん（55）は「子どもの頃から体に染みついているお祭りだったが、震災前の2月に子供らと来たのを最後に、つらくて来られずにいた。今年は七回忌なので来たが、あの頃から景色も気持ちも変わりすぎて……。1ミリでも進むために、今年も1年、頑張ろうと思う」とかみしめるように話した。